

近代日本における異体字の研究

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻

山下真里

1 本研究の目的

漢字には、例えば「国」と「國」のように漢字の三要素「形音義」のうち、形のみが異なる字体である異体字が存在する。本研究はこのような異体字という現象について、(1) 異体字の盛衰とその要因および(2) 異体字の機能という観点から考察を行うものである。

(1) については、異体字の盛衰時期および盛衰要因を明らかにすることで、異体字が存在する理由の一端が明らかになると考えられる。そこで本研究では、「広」「鉞」「𧰨(銭)」という字体を対象に字体の盛衰時期および盛衰要因を明らかにする。(2) については、同じ字であるにもかかわらず、異なる形のものが保持されるということは、そこには何らかの差異があり、それは異体字のもつ何らかの機能を反映したものと考えられる。そこで、本研究では、字体範疇「俗字」と「略字」を対象として、両者の内実および差異から異体字のもつ機能の一端を明らかにする。以上により、異体字という現象が存在する理由の一端を明らかにしたいと考える。

ところで、異体字の実態は時代や地域によって異なるため、研究を行う際には時代・地域の設定が必須である。本研究においては近代日本を対象とすることにする。それは、(1)

(2) について明らかにするのに適した時代であるばかりでなく、近代には異体字に関わる変化が多く起きているため、異体字研究にとって極めて重要な時代として位置づけられるためである。また、従来の研究において近代日本を対象とした異体字研究はほとんど行われていない。これは、近代になると出版物の字体はいわゆる康熙字典体になるため、異体字が見えにくくなる一方で、手書きの文書は歴大に存在するため、異体字研究の資料としては活用できてないことによる。このような状況であるため、近代日本を対象とした異体字研究を行うためには、まず、調査の対象となる資料について考える必要がある。

そこで、本研究では、近代日本における異体字研究の資料について考察を行った上で、それらを活用して(1) 異体字の盛衰とその要因および(2) 異体字の機能を明らかにする。

2 近代における異体字研究の資料

近代日本の異体字を考察するためには、まずその実態を明らかにするための資料が問題となる。本研究では、近代における異体字研究の資料として、近代の手書き文書と近代教育漢字字体資料が有用であることを明らかにした。

近代の手書き文書とは、おおむね近世以前の古文書に対応する資料である。それらの資料の有用性として、①異体字の出現時期を遡ることができること、②使用文脈を踏まえた考察ができること、③字形のバリエーションを知ることができることの3点を指摘した。

近代の手書き文書は、調査対象漢字が多く使用されると考えられる分野の文書を重点的に調査するという方法によって活用することが可能であることを述べた。

また、近代教育漢字字体資料とは、主に学校教育関係者によって作成された学校教育で使われるテキストや教員向けの教授法指南書などの資料で、正字と異体字を対にして示す資料のことである。それらの資料は、仮名遣いや文法、手紙や作文の書き方などに並ぶ一項目として異体字を掲げている。ここに掲げられている異体字は、資料中に「社会で使われる字体を掲げた」という記述が見られ、また、近代に使用されていた手書きの字体といわれる新字体が多く掲げられていることから、近代に使用されていた異体字を反映したものであり、異体字研究にとって有用な資料であることを指摘した。さらに、これらの資料を適切に活用するために、資料同士の影響関係と資料の特徴を明らかにした。

3 異体字の盛衰とその要因

異体字の盛衰については「広」「鉷」「𧰨（銭）」という字体を対象として調査を行った。その結果、「広」「鉷」という字体は近代以降に生成された字体であること、「𧰨」は近代以降に広く使用されるようになるが、昭和 20 年代以降に衰退した字体であることが明らかになった。「鉷」という字体の生成要因としては、「鉷」という漢字の使用頻度の増加を指摘した。そして、使用頻度の増加は、近代以降に鉷業が発達したことにより、「鉷」という漢字を含む鉷山関係の語彙が増加したことによって引き起こされたと考えた。また、「広」という字体の生成要因として、「鉷」という字体の省記方法の転用を指摘した。「𧰨」という字体が近代以降広く使用されるようになった要因としては、金銭単位「銭」の採用による使用頻度の増加を、衰退要因としては、物価の上昇による「銭」という漢字の使用頻度の減少および金銭単位「銭」の廃止を指摘した。また、「鉷」字の展開要因としては、鉷夫が加入していた相互扶助組織「友子」を介した鉷山間の移動や手紙のやり取りおよび鉷山経営者の移動があることを指摘した。

4 異体字の機能

異体字の機能については、字体範疇「俗字」と「略字」の内実および差異という観点から考察を行った。その結果、俗字は、正字ではないが規範的な字体に準ずる字体であること、それに対して略字は規範的ではない字体であることが明らかになった。近代日本において規範性を有する字体には正字もあったが、それにもかかわらず規範性が高い字体として俗字が存在したことについては、正字は漢字字書の世界における規範的な字体であり、俗字は通俗辞書の世界における規範的な字体であるという位相差があるためであることを明らかにした。これは、近代になり康熙字典体を正字とする伝統が新たに形成された結果、康熙字典体とは異なる字体である俗字は規範的な字体ではなくなってしまったということであり、このような流れの中で、正字ではないが規範性を有する字体のカテゴリーとして字体範疇「俗字」が成立したことを指摘した。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	山下 真里
論文審査担当者	(主査) 教授 小林 隆 教授 齋藤 倫明 教授 千種 眞一 准教授 大木 一夫 准教授 甲田 直美
論 文 名	近代日本における異体字の研究
<p>本論文は、近代日本における異体字について、手書きの文書および近代教育漢字字体資料を用い、その様相を明らかにしようとしたものである。全体は3部8章からなり、それに序論としての序章、まとめとしての終章が付く。</p> <p>まず、序章において異体字研究の観点・方法を概観し、これまでの問題点を明らかにして、それをふまえ本論の目的を述べる。また、本論における術語の規定もおこなう。</p> <p>続く第1部「近代日本における異体字研究の資料」においては、近代日本に通用する異体字を明らかにするための資料2種について論ずる。一つは、これまでほとんど利用されることのなかった近代の手書き文書であり（第1章）、もう一つは、教育関係のテキストや教授法指南書等で、仮名遣いや手紙の書き方の項目とともに異体字を掲げる資料（＝近代教育漢字字体資料）である（第2章）。いずれも、近代日本における異体字研究において有用な資料であることを明らかにする。</p> <p>第2部「近代日本における異体字の盛衰」においては、近代の手書き文書を中心に用いて、近代において新たに生まれた異体字がどのように生まれ、定着し、衰退するのかという変化の過程を精細に明らかにし、その上で、その要因について検討を加える。生成・定着については「広」「鉦」「繆」字（それぞれ「廣」「鑛」「銭」字の異体字、第3～5章）、衰退については「繆」字を検討する。とくに、「鉦」の使用拡大には友子という鉦山労働者のネットワークが関わることを明らかにする。</p> <p>第3部「近代日本における字体規範」は、主に近代教育漢字字体資料を用い、それらをさらに整理し（第6章）、近代に特徴的な字体範疇「俗字」「略字」の内実を明らかにする（第7・8章）。両者は従来その区別が曖昧であったが、字体範疇「俗字」とは、かつては規範的な字体であったもので、近代においても印刷物などでも用いられる等、一定の規範性を有するものであり、字体範疇「略字」とは、手書きにのみ用いられる非規範的な性格をもつものであるということを明らかにした。</p> <p>終章においては、以上をまとめながら、本論文の意義と異体字研究の展望を述べる。</p> <p>本論文は、従来用いられてこなかった近代の手書き文書、近代教育漢字字体資料を異体字研究資料と位置づけ、その利用方法をあらたに提示し、異体字研究の方法的基盤を固めるものである。また、ほとんど検討されてこなかった近代日本に通用する異体字の生成・定着・衰退の過程を明らかにし、その要因を提示した。同時に、従来その区別がはっきりしなかった「俗字」「略字」などの字体範疇の内実も明らかにした。この成果は異体字研究、さらには文字・表記史研究に大きく寄与するものといえ、高く評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	